



Data

監督: ヨルゴス・ランティモス

出演: オリヴィア・コールマン/エマ・ストーン/レイチェル・ワイズ/ニコラス・ホルト/ジョー・アルウィン/ジェームズ・スミス/マーク・ゲイツ/ジェニー・レインス
フォード

👁️👁️ みどころ

オードリー・ヘップバーンは『ローマの休日』(53年)のアン“女王”役でアカデミー賞主演女優賞をゲットしたが、オリヴィア・コールマンも本作のアン“女王”役で同じ賞を！もっとも、同じ名前でも同じ賞でも、2人の女優は美貌も演技もそして性格も大違い！そりゃ、本作はFOXサーチライト×ギリシャの鬼才ヨルゴス・ランティモス監督のコラボだもの。

原題の『THE FAVOURITE』を『女王陛下のお気に入り』なる邦題にしたのはお見事。アン女王を軸とし、絶対的権力者の女官長と野心的な侍女。三者三様の嫉妬や足の引っ張り合いは実に愉快！習近平体制の中国では、近時“華美で享樂的な空気をまき散らす”宮廷ドラマは放映禁止とされたが、女王陛下の国で二大政党制の議会在機能する国(?) イングランドでは、それもOKだ。

フランスを統治するルイ14世との戦いや、そのための戦費調達という軍事・政治面も大切だが、それもこれも女の戦いに勝つてのこと。しかし、その勝者は・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■FOXサーチライト×ギリシャの鬼才ランティモス！■

①作品数は年間最大12本を目安とする、②制作費は1500万ドル以下の低予算、等「FOXサーチライト」が定める「刺激的なスタジオであるための5ヶ条」は『スリー・ビルボード』(17年)の評論で詳しく書いた(『シネマ41』18頁)が、近時の「FOXサーチライト」の快進撃はすごい。他方、ギリシャ出身のヨルゴス・ランティモス監督はカンヌ

国際映画祭の常連で、既に多数の賞を受賞しているが、その作品は難解かつ奇妙キテレツ！『籠の中の乙女』(09年)は観ていないが、『ロプスター』(15年)、『シネマ 37』未掲載)がそうだったし、最新作の『聖なる鹿殺し』(17年)もそうだった(『シネマ 41』184頁)。もちろん、「奇妙キテレツ」は褒め言葉だ。

本作のパンフレットによれば、FOX サーチライトは『シェイプ・オブ・ウォーター』(17年)、『シネマ 41』10頁)の大成功を機に、同作のギレルモ・デル・トロ監督とオーバーオール・ディールと呼ばれる専属契約を結んだそうだが、私が思うに、メキシコ生まれのギレルモ・デル・トロ監督も『バンズ・ラビンス』(06年)、『シネマ 16』392頁)を観たときからかなりの変人・・・？要するに、FOX サーチライトはそういう作家性の強い、個性的な監督が大好きで、相性がいいのだろう。

しかし、本作はFOX サーチライトとしては珍しい(?) イギリスの宮廷モノだから、きっとハリウッド風の華やかな大作。そう思っていたが、主人公は有名なエリザベス女王やマーガレット女王ではなく、アン女王だからかなりマイナー。また、ヨルゴス・ランティモス監督とコラボした本作では、FOX サーチライト側からは一切の口出しを控え、監督の自由に撮らせてほしい。『ナイロビの蜂』(05年)、『シネマ 11』285頁)で主演女優賞を受賞した大女優レイチェル・ワイズや、若手ながら『ラ・ラ・ランド』(16年)、『シネマ 39』10頁)でアカデミー主演女優賞を受賞したエマ・ストーンを起用すれば、その出演料だけでFOX サーチライト規定の制作費1500万ドルを軽くオーバーしそうだが、さて本作の制作費はHow much? また、その内訳はHow much? “FOX サーチライト” × “ギリシヤの鬼オヨルゴス・ランティモス監督”の本作については、まずはそういう興味から・・・。

■作品賞、監督賞の他、3女優がすべて候補に！結果は？■

本作は、アカデミー賞の前哨戦となるゴールデングローブ賞で主要4部門5ノミネートされ、結果オリヴィア・コールマンが主演女優賞を受賞した。しかして、第91回アカデミー賞では作品賞、監督賞の他、オリヴィア・コールマンが主演女優賞に、エマ・ストーンと、レイチェル・ワイズが両者とも助演女優賞にノミネートされたからすごい。結果は作品賞は『グリーンブック』に、監督賞は“ネット配信”で大きな話題を呼んだ『ローマ』のアルフォンソ・キュアロン監督に。そして、助演女優賞はゴールデングローブ賞と同じ『ビール・ストリートの恋人たち』のレジーナ・キングに譲ったが、主演女優賞だけはゴールデングローブ賞に続いて見事にオリヴィア・コールマンがゲット！ほぼ大方の予想通りだ。

『ローマの休日』(53年)では新人女優のオードリー・ヘップバーン扮するアン女王が妖精のような美しさで世界中の人々を魅了し、アカデミー主演女優賞を受賞した。それに対して、本作にみるオリヴィア・コールマン演じるアン女王は美しさなどこれっぽっちもない、どちらかというと“大阪のおばちゃん”的雰囲気を持った、わがままおばさんだ。

厚化粧すると、アビゲイルから言われたとおり、アナグマのようだし、すっぴんだと、かなりのブス。しかし、主演女優賞はミスコンではないから、美しさを競うものではなく、あくまで演技力がポイントになる。そんな目で見ると、本作におけるオリヴィア・コールマンの演技はまさにアカデミー主演女優賞にピッタリだ！

もっとも、オリヴィア・コールマンは『ロブスター』に出演していた時も、私には全く印象に残らなかったし、その他の作品でも彼女を知っている日本人はほとんどいないはず。そんな女優を“制作費1500億円以内”のFOXサーチライト作品にアン女王役で出演させ、見事ゴールデングローブ賞とアカデミー賞の主演女優賞を受賞させたヨルゴス・ランティモス監督の手腕はすごい。オリヴィア・コールマン、おめでとう！

■中国では華美な宮廷ドラマは放送禁止！本作では？■

中国では、2018年は『戦狼2』（17年）が興行収入約1000億円という大ヒット（歴代1位は『アバター』の約2700億円、2位は『タイタニック』の約1800億円）を記録したが、同作は中国共産党も推奨する“国威発揚映画”だった。他方、習近平体制の中で何かと報道規制が強められている昨今の中国では、2019年1月、共産党系の北京日報が中国版ツイッター・ウェイボー“微博”の公式アカウントで、ドラマを名指して批判。「華美で享乐的な空気をまき散らし、勤労・儉約の美德に反している」「嫉妬や足の引っ張り合いばかり描いた宮廷闘争は我々が提唱する社会主義の核的価値観と相いれず、社会に悪影響を与える」と指摘したことから、中国で大人気だったネット宮廷ドラマのテレビ放送が次々と中止されたらしい。

そのドラマの1つが「延禧攻略」。これは清朝の後宮「延禧宮」を舞台に、様々な苦難を乗り越え、乾隆帝の妃に上りつめた女官が主人公で、2018年にインターネットドラマとして公開されると、豪華なセットや衣装、また裏切りや陰謀など濃密な人間模様が話題となり、動画の年間再生回数が182億回で中国トップを記録。東南アジアでも人気を博し、日本では今月から放送が予定されているらしい。ところが、公式アカウントの翌日から、ドラマの放送を予定していた浙江省や山東省などのテレビ局が急きょ中止し、番組を差し替え、別の宮廷ドラマの放送も中止になった。それについて、ネット上では「まるで宮廷ドラマ発禁令だ」「大衆ドラマに真面目に反応しすぎだ」と戸惑いが広がっているようだ。月に1度やっている中国語の勉強会で、私は現実にはネット上で書かれているさまざまな意見を読んだが、それを見ていると表現の自由がいかに大切に民主主義の根幹をなすものであるかということがよくわかる。

それはともかく、中国の宮廷ドラマが“華美で享乐的な空気をまき散らしている”のなら、英国の宮廷ドラマだってそれは同じ。また、宮廷ドラマは必然的に華美になるため、衣装やセットに大金がかかるというのが相場だが、さて本作は？それについてはパンフレットで詳しく解説されているので、How much?の観点からも本作の華美さの程度をしっ

かり検討したい。また、本作はヨルゴス・ランティモス監督流の視点で3人の女たちを主人公とし、“嫉妬や足の引っ張り合いばかりを描いた宮廷闘争”のドラマだから、ひょっとして中国では上映禁止に・・・？

■□■英国は当時から二大政党制！その機能は？■□■

エリザベス女王は有名だから、彼女を主役に据えた映画はたくさんある。例えば、ケイト・ブランシェットがエリザベス1世を演じた『エリザベス：ゴールデンエイジ』（07年）では、16世紀後半は未だ弱小国だったイングランドが、1588年に、当時の最強国スペインの“無敵艦隊”を撃破する物語や、エリザベス1世の暗殺未遂計画など劇的な展開が多く、楽しかった（『シネマ18』174頁）。しかし、アン女王の時代のイングランドがルイ14世統治下のフランスと戦っていたことはあまり知られていないはずだ。フランスとの戦いを最高司令官として現地で指揮しているのは、サラの夫で、モールバラ卿のジョン・チャーチル（マーク・ゲイティス）。そして、膨大な戦費をはじめとするイングランドの歳費を管理しているのは、大蔵卿のゴドルフィン（ジェームズ・スミス）だ。

流産、死産等で自分が産んだ子供17人をすべて失ったアン女王は、子供の代わりに17匹のウサギを飼っていたが、これは有名な「生類憐れみの令」によって“お犬様將軍（犬公方）”と呼ばれた徳川第5代將軍綱吉のような実害はなかったから、オーケー。また、美食が過ぎたためか通風に悩まされていたアン女王は、いつも女官長のサラ（レイチェル・ワイズ）に「足を揉んでくれ」と注文していたが、それも実害はなし。しかし、フランスとの戦争を継続すべき？それとも終結すべき？そんな重要な判断をこんなおばさんに委ねて大丈夫なの？

そう思わざるをえないが、そんな時に機能していた（？）のが、イングランド議会の二大政党制だ。イングランドの議会は、戦争推進派のホイッグ党と終結派のトーリー党の二大政党の争いで揺れていた。戦費のために税金を上げることに反対するトーリー党のハーリー（ニコラス・ホルト）はアン女王にフランスとの講和を訴えたが、体調不良の女王の代理を強引に務めるサラはホイッグ党支持だったから、女王の決断は「戦争は継続！」に。EUからの離脱を国民投票で決めた現在の英国議会も二大政党制だが、昨今はその機能のマヒぶりが目立っている。しかして、18世紀の初頭、フランスとの戦争を継続すべきかそれとも終結すべきかを巡る、イングランドの二大政党制は機能しているの？本作では、そんな政治的視点もしっかりと！

■□■原題は『THE FAVOURITE』。なるほど、なるほど！■□■

本作の邦題は『女王陛下のお気に入り』だが、原題は『THE FAVOURITE』。私が生涯ベスト1に挙げる映画は、ミュージカル映画『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）だが、その中の1曲にジュリー・アンドリュースと子供たちが一緒に歌う『My Favorite

Things』がある。これは、「悲しい気分の時に、私のお気に入りたちをただ思い出せば、つらい気分もなくなってしまう」と歌うもの。そして、この『My Favorite Things』は、① raindrops on roses (薔薇に落ちた雨の滴)、② whiskers on kittens (子猫のひげ)、③ bright copper kettles (赤褐色のやかん)、④ warm woolen mittens (あったかい羊毛の手袋)、⑤ brown paper packages tied up with strings (紐で結ばれた茶色の紙包み) 等々、身近なものが多かった。しかし、本作の「FAVOURITE」はそんな“身近”で“軽いもの”ではなく、いかんにしてアン女王の“FAVOURITE” = “お気に入り”になるかを巡って権謀術数の限りを尽くす宮廷ドラマだ。

現在、アン女王の絶対的な“FAVOURITE”は女官長で王室歳費監理官、さらにアン女王の政治顧問的な役割で国家を指揮しているサラ。物語が進んでいくと、この2人の怪しげな関係(?)を含めて、ヨルゴス・ランティモス監督が描くイングランド宮廷の実態が明らかになるので、それに注目!

他方、私が“宮廷モノ”としてのみならず、“法廷モノ”として大好きな映画が『マリー・アントワネットの首飾り』(01年)だ。ここでは、「ベルばら」の世界を楽しみながら18世紀のフランスの法廷を興味深く勉強することができた。そして、そのストーリーを牽引したのは、ヴァロア家の再興に執念を持って大人になったヒラリー・スワンク扮する美女ジャンヌだった。それと同じように、本作で新たにアン女王の“FAVOURITE”になろうとしてサラ女官長との間に割って入るのが、上流階級から没落して、今は生活にも困窮しているアビゲイル。つまり、アビゲイルはアン女王に取り入りながら、サラ女官長に対抗して女王の“FAVOURITE”になろうとする野心を見せていくわけだ。もともと、国を動かす2人と最も近い位置にいるアビゲイルに目をつけたハーリーから、アン女王とサラの情報を流すように迫られた時、アビゲイルは「私を救ってくださった奥方は裏切れません」とハッキリ拒否していたから、彼女に当初からそんな野心があったとは思えないが、いつの頃からそんな野心がメラメラと・・・。

そこからの、サラとアビゲイルによるアン女王の“FAVOURITE”になりたい合戦が、本作の見モノだ。さらにすごいのは、大阪のおばちゃんにすぎないように見えるアン女王も、2人の嫉妬心を十分理解し、それを巧みに操ることによって自己の立場をキープしようとする。男のヨルゴス・ランティモス監督が、なぜここまで巧みに、女3人の心理戦を描くことができたの?本作については、原題の『THE FAVOURITE』をしっかり頭に置きながら、その宮廷ドラマとしてのドロドロ、ネチネチしたストーリー展開をタップリと楽しみたい。

■□毒殺?そこまでやるか!勝者はどちら?■□

「ベルばら」で最初に大人気になったのは、オーストリア帝国のハプスブルク家からフランスのブルボン家に嫁いできた14歳の皇女マリー・アントワネットを含む王太子妃を

護衛する近衛士官で男装の麗人オスカルだった。レイチェル・ワイズ演じる本作前半のサラは、女ながら（女だからこそ）それに勝るとも劣らない、美しさと能力を存分に発揮していた。したがって、当初は召使いとして雇ったアビゲイルなど、屁みたいなもの。ところが、アビゲイルが裏庭から摘んできた薬草を痛風に苦しむ女王の足に塗ると、これがよく効いたから、サラは「この召使いは意外にに使える」と考えて侍女に昇格させた。ところが、そこで女王と自分の仲が“女の友情以上のもの”だということを目撃されたのが、ある意味でケチのつきはじめだ。

アビゲイルがハーリーからの要請をキッパリ断り、そのことをサラにちゃんと報告したのは立派だったが、それをサラに誉められるどころか、「双方と手を組む気かも」と探られ、秘密は守るようと空砲で脅された時点では、明らかに両者は格が違っていた。しかし、アビゲイルが17人の子供の代わりである17匹のウサギと仲良しになって、うまく女王に取り入り、女王のお守り役を勤めながら女王の信頼が高まっていくと・・・？その時点でのサラとアビゲイルの違いは、サラは何事も本音で高飛車に女王に“モノ申す”のに対して、アビゲイルは「陛下はお美しい」「私が男だったらあなたを奪ってしまう」などと甘い言葉で取り入ること。そんな状況が続くと、ついつい女王はサラではなくアビゲイルを重宝するようになったから、サラは少し慌て気味だ。しかし、何と言ってもサラと女王は“他人は絶対知らないヒ・ミ・ツ”を持っていたので、あくまで強気だったが、ある日女王から「アビゲイルは口でやってくれるのよ」と言われると、アレレ・・・。

そんな状況下、女王は「アビゲイルを寝室付き女官にした」とサラに言い放ち、サラを遠ざけようとしたから、更にアレレ・・・。このように、女官長に就任して以来、はじめてその権力に陰りが見えたサラに対して、ある日アビゲイルが仕掛けたのは毒殺！？まさか、そんな！

さあ、そんなあっと驚く展開は、あなた自身の目でしっかりと。しかして、アン女王の「FAVOURITE」を巡る勝者はサラ？それとも、アビゲイル？

2019（平成31）年2月28日記